

胃 集 団 検 診 （ 職 域 ）

動 向

平成17年度の職域における胃間接X線撮影検査の受診者数は46,846名（対前年比102.5%）であった。昨年度より1,125名増加した。主たる増加理由は、新規の事業所の実施によるものである。

当協会では、精度の高い検診サービスのために、X線装置のデジタル化を積極的に進めている。

デジタル化によるメリットは①直接X線撮影と同等の高精度な画像が得られる②X線被曝量の軽減③画像の劣化が無い④フィルムを使わず現像が不要等、が挙げられる。

急速なデジタル化に伴い、設備や検診システムの見直しも必要となってきた。

受診者動向としては、胃検診は労働安全衛生法による実施義務がないことや、バリウムに対する嫌悪感などにより、受診を避けている者も多く見受けられた。

胃がんは最近では治療法も発達し、早期に発見すれば、治癒が可能ながんである。また、検診の有効性も十分に証明されている。早期に発見するためには定期検診が必要であり、毎年一回は検診を受けることが望まれる。

方 法

平成17年度は胃検診車、施設合わせて職域検診に11台（内、デジタル装置8台）の装置で対応してきた。撮影方法は日本消化器集団検診学会の提唱する前壁二重造影像を取り入れた撮影法で行い、造影剤も高濃度造影剤を採用し、より情報量の多い画像の提供が可能になっている。今後更に情報量の多い診断能の高いX線写真の提供に努力していきたい。

また、Aグループへの対応は要精密検査として直接X線検査による精密検査の方法と内視鏡検査による方法とに二分され、内視鏡検査では生検による最終診断まで可能である。

平成17年度において最も期待されるのは新たに導入されるデジタル検診車である。直接X線撮影の情報と同等の画質の提供が可能で、被曝においても直接撮影より軽減が可能になったことは今後の検診シ

ステムに変化が生じることも予測される。これにより検診のデジタル化が急速に早まることになると考ええる。また、画像情報の提供はC D - Rでの提供を考えている。

結 果

受診者数の動向は前年度より僅かに増加した。男女比は例年どおり大きな変化は無い。Aグループの協会を受診する団体の要精密検査は9.8%で前年度より0.7%減少している。精密検査を受診した人は878名で34.9%とやや低下してきている、年々の減少傾向であり関心度が薄れてきているのかもしれないが、せっかく検診を受診し異常が認められてもそのまま放置しては胃がん検診の効果はない。受診者の低下は問題である。精密検査受診群から発見された胃癌は7名0.8%と前年度0.7%より高かった。胃ポリープ及び胃ポリポージス231名、胃潰瘍及びその癒痕は114名、十二指腸潰瘍及びその癒痕は91名、共存潰瘍及びその癒痕38名、その他の疾患は161名と何らかの疾患を持っている人は631名71.9%と高率を示している。

更に問題となる未受診者対策は協会では把握できない部分でもあるが、未受診となった1636名については何らかの方法で受診勧奨が必要である。その第一の理由は878名から7名の癌が発見されていることである。今後少なくとも要精密検査の指示がでたら必ず受診してほしい。

関係の集計表は72頁に掲載